stay hungry, stay foolish! (ハングリーであれ、愚かであり続けろ！)

金順姫 (日本)

「何をそんなに複雑に考えるの？ 生きることってみんなそんなもんだよ！」20 代後半に入り進路について悩む私に周囲の同僚たちと友人たちはこのように話した。 ところで日本語塾で出会った日本人先生の言葉は違った。「もっと悩んで！ 自分の人生について悩むのは当たり前じゃない？ 一度きりの人生だからね！」先生のその言葉が私には大きな発想の転換であり、そうして私は本田先生との縁を皮切りに日本留学を夢見るようになった。 27 歳のある日、ビザ申請などすべての手続きを一気に終えて両親に日本行きを通知した。 十数年前、保守的な両親は豊かでない田舎暮らしの中で息子 3 人の大学進学のため、高校の普通科へ進学しようとする私の希望を蹴って商業高校に進学させた。 卒業後 3 年間職場で事務職として働いた私は、その後営業職に転職するも、何かにいつも渇きを感じていた。 社会生活が 4 年ほど経った時、独学で学士号が取得できる「独学士」に挑戦してみたが、忙しい日程と週末を利用した聴講についていけず、数ヶ月であきらめてしまった。 27 歳には夜間大学の入学窓口を叩いてみたが、当時は社会人に晩学の扉は広くなく、現実の壁は高いだけだった。 両親は私が適当に職場生活をして平凡に結婚して暮らすことを望んでいた。 しかし、私は 8 年間の職場生活に終止符を打ち、環境を変えるため、28 歳で日本の地を踏んだ。「30 代の人生は私が開拓する！」と心の中で叫びながら。

留学生活と結婚

日本での留学生活は日本語学校から始まった。 最初、私の目標は日本語学校卒業後ホテル関連分野を専攻し、ホテル従事者になることだった。 専門職に対する希望と多くの人に接することができるホテル業の仕事が私によく合うと思った。 韓国で日本語塾に通ったが、私の日本語はそんなに簡単に上達しなかった。 実践的な日本語を学ぶため、また、生活費を稼ぐためにアルバイトを探さなければならなかった。 つたない日本語でアルバイトを探しに出て、数ヶ所断られた末に日本人が経営する居酒屋でアルバイトを始めることができた。週に 2、3 回皿洗い、カクテル作り、ホールサービス、掃除などをした。 外国人は一人だけだったが、聞くことと話すことになかなか慣れておらず、ミスもたくさんした。 しかし、それなりに 8 年という職場生活で得た自信もあったし、頑張れば人々の心は通じると思って一生懸命働いた。 給与に含まれないことを知りながらも参加したい気持ちで朝早く出て出勤する人々に店の宣伝用ビラを配ったりもした。 2 ヶ月ほど経ったある日、午後に夕方のアルバイト時間を確認するためにバイトリーダーに電話をした時、衝撃的な話を聞いた。 「キムさんはクビになりました。」と。 その日の前夜、アルバイトをして、朝チラシを配り、社長に挨拶までしてきたが、社長からは何のお話もなかった。 結局、日本語が下手で仕事がまともにできないという理由で私は一ヶ月余り働いた日本の店でクビになったのだった。 理由を聞きに行ったら、社長は私をバイトリーダーに任せていたので、自分は知らないことだ

と言って席を外してしまった。 今思えば「言葉の通じない外国人であるが故、日本の居酒屋の雰囲気もよく読めなかった私がどれほどもどかしかっただろうか。」と理解できる部分もあるが、当時はその状況がとても悔しくて納得できなかった。 言語と文化の壁を実感した苦い経験だった。

日本語学校を終える頃、留学生活が容易ではないという事実を実感していたところ、知人の紹介で同い年の男性に会った。 二人とも婚期年齢で結婚の知らせを待っていた両家の両親はとても喜び、結婚の準備は瞬く間に進められた。 すでに 30 歳を目前にして、ホテル関連専門学校への進学も結婚という現実の前から遠ざかり、ホテル従事者の夢もそれと同時に消えてしまった。 その後アルバイトで日本語学校の事務補助の仕事を得て、2 年後には正社員になった。 仕事を始めて間もなく息子が生まれ、2 ヶ月が過ぎて実家の母親が来るやいなや職場に復帰した。 今思えばやっと得た働き口を失うのではないかと必死に奮闘していた。 生後 3 ヵ月から小学校入学前までの 6 年間、保育園に通っていた息子は、3 歳まで病気がちで、病院を頻繁に通うなど大変な時期もあった。 その度に初心者の両親である夫と私は、遠くにいる韓国の家族より保育園の先生と友達の母親、インターネット情報を頼りに大変な時期を乗り越えることができた。

夢に描いた大学生になる

育児と職場生活で忙しい日常を送っていたある日、偶然夜間大学の情報を目にした。50 代以降、いつか子供が成人になって経済的にも余裕ができたら大学に行きたいとい

う夢を見ていたが、「少しでも若い時に始めた方が良いのではないか。」という夫の言葉に勇気付けられ夜間大学に願書を出した。 当時、夜間大学の需要があまりなく、願書を出した夜間大学の学科も縮小され、志願可能な学科が英文学科だけだったが、選択の余地がなかった。 夫の協力と会社の配慮に支えられ、私は 38 歳で大学生になった。 「学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである。」 最初の授業である先生の言葉は私の心の中に長い間余韻を残した。 そのように始まった夜間大学の授業の日々はとても忙しかった。 17 時 45 分に会社を終えて 18 時 10 分から始まる授業に合わせて自転車を漕いで大学に到着した。 21 時 30 分に授業が終われば、22 時が過ぎてから家に戻ってくることができ、課題と家事を終えて 0 時が過ぎてから眠れる生活を 4 年間続けた。 土曜日は足りない部分を埋めるために他のキャンパスの科目を受講しなければならず、日曜日は図書館で課題と奮闘する日々を送った。 英語という外国語を 20 年ぶりに勉強することは容易ではなかったが、いつも夢見ていた大学生活は大変な勉強さえも楽しく、変化への期待は胸をときめかせた。 韓国で大学というシステムを経験したことのない私は講義室に座って先生の授業を聞くだけでも幸せだったし、外国人として接する日本の若い学生たちとの交流は興味津々だった。 時々私が学期初めに講義室に入ると騒いでいた学生たちが突然「シン」と静かになったりした。 私が一番前の席に座ると「何だ! 先生じゃなくて学生じゃないか」として晩学の学生にだまされたといい後ろからむずむずするひそひそ話が聞こえたりもした。 外国人がほとんどい

ない私立大学で私は日本の学生たちと年齢が違うだけで同じ大学生として、更に情熱的に大学生活を続けた。 レポートを作成することも、決められた時間内に叙述試験を受けることも慣れていなかったが、外国人の先生たちは私の実力より積極的な態度に高い点数を与えた。 私の挑戦はここで止まらなかった。 思う存分大学生活を満喫したいという思いで「夜間剣道部サークル」に入った。 剣道の実力は初心者から始まって初心者で終わってしまったが、韓国でドラマを見ながら憧れた剣道を経験し、他の学科の学生たちとも交流できた良い機会だった。 道具を身にまとい 20 代前半の若い男子学生たちと対戦をした後は、息は切れそうになり、殴られた頭は涙がでるほどひりひりし、いつのまにか腕には紫色のあざができていたりもした。 韓国のような長幼有序の儒教的文化が根強くないためか、隔てない彼らの待遇が楽な時もあった。おかげさまで大学生活の大きな思い出として残った。

東日本大震災が残したもの

大学 3 年生が終わる頃の 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起きた。 東北地方、その中でも私の住む宮城県で最も多くの犠牲者と被害が発生した。 その前までは大小の地震には慣れていたが、それまで経験したことのない大きな揺れとともに発生した停電でおびただしい恐怖が襲ってきた。 会社で驚いた胸をなでおろしながら小学校に駆けつけ、頭に防災頭巾をかぶって待っている息子を連れて家に帰った。 マンション 4 階の家は散乱した食器と倒れた家具で大惨事になっていた。 上の階から水が漏れている

のか壁には水が流れ、電気、水、ガスはすべて途切れた状態だった。 続く余震に息子は机の下に入り泣き出した。 歩いて 10 分の距離にある「仙台韓国総領事館」が避難所の役割を果たしていることも知らず、地域避難所に指定された小学校に行こうとすると、駅で足止めされて帰宅できなくなった人々で、すでに足の踏み場もない状態だという。幸い、子ども会の父兄の助けで近くのコミュニティセンターに身を寄せることができた。小学校 3 年生の息子の手を握って雪が降る真っ暗な夜道を歩いて避難所に辿り着いた記憶は今も生々しく残っている。毛布やおにぎりの配給を受け、自家発電もあったが、携帯電話の充電は考えられず、韓国の家族や知人への心配と地震の被害がどの程度なのか、正確なニュースも知らないまま続く余震を恐れながら二晩を過ごした。 電気が復旧した後、家に帰ってテレビから接した津波被害映像は衝撃そのものだった。 自宅からさほど遠くない地域の膨大な被害映像に、ただ言葉を失い涙が溢れた。あたふたと韓国の両親にも連絡をしたところ、私たちとの連絡が途絶えて心配が並大抵ではなかったという。 それもそのはず、韓国で放送された津波の映像を見て大きな衝撃を受けたうえ、2 日間連絡が取れなかったため、兄弟たちが東京にある韓国大使館に行方不明の届け出をして、連絡が来るまで気を揉んだという。非常食を確保するためにコンビニを回って、生活用水を運んでくる不便な生活をしていたところ、次は福島原発問題が大きく報道され始めた。見えない恐怖にうわさだけが飛び交い、ガソリンの補給に赤信号が灯り、仙台韓国総領事館から自国民保護のために避難を促す連絡が来た。結局、地震発生

から一週間で夫を残して息子と韓国総領事館で準備したバスに乗って秋田に移動した。 自宅から近い仙台空港は、津波で浸水し、復旧が不可能な状態だった。 避難民のような凄惨な気持ちで秋田に到着して一夜を過ごし、翌日無事に韓国に帰国できたが、韓国でも体が覚えている地震の恐怖はしばらく私をびくびくさせた。 韓国にいる間、夫の実家で白菜農業を手伝いながら過ごすことができたが、心は複雑だった。 結局、2 週間で両親の心配を後にして再び日本に戻るしかなかった。 地震発生後、1 カ月で水とガスが正常に戻った。 悲しみと未来に対する不安でしばらく続いていた憂鬱さも日常を回復し、人々と会って地震を克服した話を共有しながら安定していった。 当時、私たち家族のために非常食と食べ物がいっぱい入ったカバンを背負って遠い道を走ってきてくれた日本の知人、韓国語通訳職員まで同伴してホテルを手配し、飛行機航空券の手配を手伝ってくれた「秋田国際協会」の職員、充電器と毛布を貸してくれた子供会の父兄に対する感謝の気持ちは今も忘れられない。 東日本大震災は、日本に住む外国人として「隣人」のありがたさと同病相憐の痛みを、身をもって体験できる貴重な経験となった。 そのように一生忘れられない災難を経験し、紆余曲折の末、大学 4 年生を無事に終えた。 卒業式では着物を着た多くの日本人学生の中で唯一韓服を着た韓国人学生として参加することができた。

大学院進学と新しい挑戦

大学を卒業したが、変わったことは何もなかった。 しばらく虚脱感があり、「晩学は自己満足」という悟りで自分を慰めながら日々を送った。しかし、晩学で得た学びへの渇望と新しい仕事への情熱は、私を新しい挑戦に導いた。専攻科目に対する専門性が足りなかった私は悩んだ末、韓日比較研究に方向転換を模索した。いくつかの大学院コースに問い合わせのメールをし、何度も断られた末、1ヵ所で聴講生の機会を得た。 担当先生から4月から研究生として入学の約束を受け、慎重に聴講授業を受けながら新しい勉強への期待を膨らませていった。 しかし、2月末になって、先生との面談で最終的に入学が不可能だという通知を受けた。 すでに会社には3月末で辞職届を出した状態だった。 専攻科目を生かすことができなかった自分の実力不足と情熱だけでぶつかった結果だった。 予想できなかった最終通知に一週間胃が痛い経験をしなければならなかった。 結局1年後、卒業した大学に戻り英語教育関連分野で修士課程を始めることになった。 それがまた新たな試練の始まりだということを知りながら、私はその機会をつかむしかなかった。 指導先生は大学2年生の時、私に大きな影響を与えた方で、韓日間の歴史問題に思慮と造詣が深い方だった。 研究のテーマを悩んでいた私に、先生は「韓日間の歴史認識」というキーワードを投げかけてくれた。 最初は「私がどうすればいいのか?」という心配が先立ったが、先生は「キムさんだけができることをしてみろ！」と力を入れて下さった。 内容と言語を統合した言語教育法で、学生たちが実

際に関心を持てる韓日間の歴史問題をテーマに授業を構成し、学生たちの興味と関心が言語学習に及ぼす効果を検証する研究課題だった。 実際、研究授業では韓日間にまつわる近代史の歴史的事件を紹介し、韓国人留学生をゲストとして参加させた。 日本の学生たちとの討論を通じてお互いの考えを交換し、アンケート作成を通じて前後の結果を分析した。 市内で「韓日フリーハグキャンペーン」を主導したある留学生を協力者として参加させキャンペーン過程を紹介してもらった。 先生の言葉通り私だけができる、生きている韓日交流の研究授業になったと感じた。 しかし、最後に残った論文執筆過程で厳格な先生の前に自尊心は奈落に落ちた。 英語という壁にぶつかり、いたたまれない気持ちや葛藤の連続だったが、周辺の人々の助けを受けながらついに完成することができた。 大学院 2 年期間中、もう一つの挑戦は「英語中·高教諭免許」取得だった。 教諭免許を取得して日本の学生のように現役の先生になるということは現実的に不可能だったが、教育について深みのある勉強をしてみたかった。 最後の関門である中学校 2 年生を対象にした 3 週間の教育実習は、厳格な規則に従って徹底した準備と事前教育を受けながら始まった。 ちょうど息子が同じ中 2 で反抗期の真っ只中だったため、世代の差と文化の差という二つの課題をどのように克服すべきか考えなければならなかった。 教育実習は運良く(?)　いじめ問題と生徒間の骨折事故など事件事故が多いクラスを割り当てられた。 3 週間、4 時半に起きて 21 時過ぎに帰宅し、授業準備と授業進行にすべてのエネルギーを注ぎ込んだ。 しかし、やはり幼い生徒たちとのコミ

ュニケーションは容易ではなかった。 最終日に帰ってきたアンケートで「日本語も英語も分かりにくい。」「職業を考え直した方がいい。」「声だけでっかくてうるさい。」というコメントに胸に押さえていた何かが吹っ切れて、爆笑と涙を同時に流してしまった。文化の違いとは別に、教育的理想と世代間の理解はなかなか解決できない課題だった。母にあたる私に生徒たちが気を遣って遠慮していると思っていたが、むしろ幼い生徒たちは私が思ったほど真剣ではなかった。 疎通を望まない幼い生徒たち、知っていても手を挙げて発表しようとしない生徒たちに情熱的で誠実な素人先生はただ面倒なだけだったのかもしれない。 そして、彼らだけの共通の関心事や話題（ゲーム、オタク、K-pop など）に近づかないと、なかなか心を開かないことに気づいた。 決められた過程だけを誠実にこなしたため、それを授業時間外に実践するには 3 週間という時間はあまりにも短かった。 生徒たちのそのような率直な表現がむしろ「今の幼い生徒たちの表現」という悟りと「いつかこの生徒たちが大学生になった時に再び会えるのではないか」というなぜか分からない希望を抱くようになった。 最後の日、私は生徒たちが帰宅した教室の黒板に大きく「また会おう！」を書いて帰ってきた。 そのように 46 歳で大学院を終え、今回は韓国のサイバー大学に編入して 2 年間、「韓国語教育課程」と「多文化専門家課程」を勉強した。 息子が幼い頃、韓国人の母親たちと始めたハングル学校の教師と文化センターで韓国語を教えていたものの、教えるための専門知識が足りないことに気づいたからだ。 韓国を離れて 20 年という時間が経って私が韓国語だけで

なく、変化した韓国社会に対して門外漢になってしまったという事実も認めざるを得なかった。20 年間、ほぼ 1 年に一回は韓国を訪問してきたが、韓国社会の急速な変化に戸惑いを感じながらも深い勉強ができないまま過ごしてきた。 日本で生活する上で韓国人としてのアイデンティティと韓国語をはじめとする文化的アイデンティティを忘れないことが、私がこれから生きていく力の源泉であることを遠い道を経て改めて悟るようになったのだ。

経験を通じて得たもの

この十数年間、勉強の他にも多くの講演会と韓日関連イシューと社会問題を扱った勉強会、ボランティア活動などを追いかけた。 また、7、8 年前からは「異文化理解プログラム」に参加し、韓国文化を紹介するために市内の小学校と中学校を訪問してきた。結婚式の時に着た韓服を手入れして着て、韓国の伝統遊びと韓国についての授業をした。幼い学生たちの好奇心に満ちた質問と瞳に大きなやりがいを感じ、私自身も多くの勉強になった。 「この子たちが成長して大学生になって韓国語と韓国について勉強するようになった時、私のことを覚えてほしい。」私はおそらく今その小さな種をまいているのかもしれないと思った。 1999 年に日本に来て 2002 年韓日ワールドカップと韓流ブームの波に乗って韓国人として日本に住みながらいつも自負を感じながら、私もいつか日本社会の一役を担えると思っていた。 東日本大震災を経験しながら隣人の意味と社会の一員として共生と相生のための私の役割が何なのか悩むようになった。日本での生

活が 20 年以上経って、今は受動的ではなく能動的な役割を作っていかなければならないと思った。 2019 年 11 月、その考えを行動で実践する機会をつかむことができた。 毎年地震の他にも台風や洪水など自然災害が絶えない日本に住み、ボランティア活動に関心があったが、気軽に行動に移すことはなかなか容易ではなかった。 ある日、偶然 SNS を通じてボランティア募集案内を見た私はすぐに行動した。翌朝早く作業服と手袋、長靴などを持って集合場所に出た。 初めて会う人たちに混じってバスで移動し、河川氾濫で浸水被害を受けた地域に投入され、清掃と整理作業を行った。 翌日はみんな真剣に何時間も泥の中でスコップを使い作業した。 肉体労働に慣れていなくてとても疲れるはずなのに不思議と疲れを感じないまま、大きな後遺症もなく嬉しい気持ちで 2 日間のボランティア活動を終えることができた。

コロナと共に訪れたチャンス

本当に想像もできなかったことが全世界を襲った。 2020 年 1 月、コロナが蔓延し始めた時、私はそれとは別に新しい試みをした。 韓国語教員資格を取得したが、若い頃から勉強で鍛えられた研究者や教育者のようにネットワークもなく、実力も経験も足りなかった。 教える機会がそれほど多くなかった私は、自ら動かなければ機会がなかなか来ないことに気づいた。 講演会やフォーラムで挨拶を交わした大学の韓国語担当者にダメ元で履歴書を送った。 自分だけの色を出すため 10 年間の成長過程を写真資料にまとめ、自己紹介文には自分だけの話を盛り込んだ。 私は立派な研究者でも優秀な

人材でもないが、私が他人と違う道を歩んできたことを紹介した。 私のような経験者が韓国語教育と韓日交流事業に活用されることを願い、そのような理由で「私自身を推薦します。」と締めくくった。 明らかに一方的な私の求職活動であり、直ちに機会が来るとは期待しなかった。コロナの急速な拡散でパンデミック状況になり、4 月から緊急事態宣言が発表され、対面で教えていたいくつかの韓国語授業も中断された。 ボランティア活動であり、オリニハングル学校の授業であり、細やかに続けていた活動が全て中断され、心身が混乱した。 多くの人が経験したコロナブルーを経験しながら、私は本とユーチューブ講演に頼って憂鬱な時はあちこち散歩をしながら心を治めなければならなかった。 そうやって夏が終わる頃、履歴書を送ったある大学からメールが届いた。 来年 4 月から研究休暇を取る先生に代わって、韓国語の授業をいくつか引き受けてほしいという内容だった。 暗いトンネルの中でかすかに見え隠れしていた光が希望に変わった瞬間だった。そのように小さな希望で新年を迎えた時、もう一つのチャンスが訪れた。 市内の公立高校で新しい韓国語の先生を探していて、私は日本の正式な教諭免許所持者として韓国語を教える機会を得た。 面接で校長、教頭先生は多様な学びを実践し、学習環境が異なる生徒たちが多い学校の特性上、私の経歴と背景が生徒たちに役立つだろうと肯定的に評価してくれた。 最初は韓国語だけを担当しようとしていたのが偶然にも韓国語の次の時間である英語授業の教員席が空いて英語授業まで引き受けることになった。 英語中·高教諭免許がその真価を発揮した瞬間だった。 まるで

パズルのように思いもよらなかったピースがはまって、私は大学と高校で非常勤講師として韓国語と英語を同時に教えるようになった。 コロナはこのように最悪の状況でも新たなチャンスを作り出した。 ハングル学校で子ども継承言語をオンライン授業に転換した時、私はユーチューブを活用した子供韓国語学習動画を提案して作った。 フィールドワーク授業のコーディネーターとして大学生を連れて韓国の韓日歴史関連施設を訪問する予定だったが、コロナの影響でキャンセルを余儀なくなれた。その代わり、学生たちとともに宮城県内にある「安重根義士と日本人看守千葉十七」の御縁を称えている大林寺を訪れた。 取材した内容と作った資料を韓国の大学教授と学生たちに紹介し討論できるオンラインセミナーに転換して実施した。「いつも足りない自分ながら、私ができることは何だろうか。」悩んでいた私に試練と新たな可能性という希望が共に訪れてきた一年だった。

これからも新しい点を打ち続ける

日本での 23 年間、私は留学生から社会人へ、また学生から社会人を繰り返しながら成長してきた。 今は 4 歳の子どもから 60 代の大人まで、多様な学習者に韓国語を教える専門職従事者になった。 「韓国語教師」という職業は韓国人という私のアイデンティティをより明確にさせた。教えることは常に新しい変化を追求し、常に自分を振り返らせる。 韓国に行くたびに訪ねる本田先生は今も私にとって心強い存在であるが、先生のあまりにも躍動的で韓国的な姿を見ると私も知らないうちに笑いが出たりする。

韓国社会と日本社会で私はその二つを知らず知らずに身につけ、時には熱くなる胸を慎重さで冷やし、受動的姿勢からダイナミックなコードに変えながら機会を作って挑戦しながら生きているようだ。 日本で過ごした23年間、義父と実家の父親が亡くなられ、2人の母親には申し訳なく、年を取るにつれて家族に対する恋しさは募る。 夫と息子、3人家族で日本に住んで20年。 そして、多感な思春期を乗り越えた息子も今は自分の夢に向かって新たな一歩を踏み出している。 夫は20年余りを共にした同志であり、私たちの日本生活は今後も多くの変化を繰り返すだろう。 コロナで3年間会えずにいる実家の母はいつのまにか80歳を過ぎて、最近は昔話をしながら私に「会いたい、すまなかったね。」と言う。 もし私が20年余り前に日本行きを選択せずに韓国に留まっていたら、今頃私は現実に順応してもっと安定した生活を送っていたかもしれない。 日本での人生は私に多くの挑戦と失敗、葛藤の中で悩みながらも黙々と前に進むしかない人生の指標を抱くようにした。 日本に来てからきっと私の人生の方向は変わったし、より多様で豊かな私だけのストーリーを持つようになった。 振り返ってみると、多くの人とのご縁を通じて得た機会と挑戦が私を導いてくれる大きな力となり、私の人生の方向を変える契機となった。 人が環境を変えることは、自分の人生を変える最も確実な方法かもしれない。 本人の選択であれ、家族の選択であれ、外国で生活していると、自分の人生で考えられなかった、より多くの外部的要素とぶつかって方向転換をせざるを得なくなる。 言語をはじめとする文化的壁にぶつかり少数集団という社会的限界の

中で、時には予期せぬ不利益を被ることもあり、限られた機会の中で成長と葛藤、妥協を繰り返していく。 私は平凡な人生を拒否し、30 代の人生を開拓するために 20 代後半に日本の地を踏み、40 代の人生を変えるために 30 代後半に大学生になった。 そして、今は 50 代になって 60 代の人生を設計している。 挑戦は失敗を通じて再成長し、準備しなければ機会が来ても捕まえられない。 最初からある絵を描くために始めたことではなかったが、いつも何かに渇いて、時には馬鹿みたいに無知で勇敢に挑戦してきた。 ふと振り返ってみると、私が通り過ぎた時間の中に数多くの点が残されていた。 そして、その点がまた他の点と加わって描き出される私の人生の絵のために、私はこれからもずっとまた新たな点を打っていくつもりである。

受賞の感想　一般散文（佳作）

stay hungry, stay foolish! (ハングリーであれ、愚かであり続けろ！)

金順姫 (日本)

9月のある日、夕方の授業を終えて疲れた体でバス停の椅子に座って携帯電話を見ると一通のメールが届いていた。 何気なく開けた瞬間、息が止まるようだった。「第 24 回在外同胞文学賞受賞者ご確認のご案内」。 第 24 回在外同胞文学賞にご応募いただきありがとうございます。 文学賞審査の結果、成人一般散文部門の受賞作品に選ばれました」胸の底から熱い何かが徐々に込みあげてきた。ときめきのようで、痛みのようで、喜びのようで…。 涙がぽろぽろと視界を曇らせ、頬を伝って流れ落ちた。希望の船を浮かせておいて待ち続け、その心を諦めようとした私にこんな奇跡が起きるとは。 「そう、人生は一日一日が奇跡ではないが、たまにはこのように珍しい奇跡をプレゼントし、再び勇気を出して一歩一歩踏み出せ！と言うんだ。」

育児と仕事、学業で前後を眺める余裕もなく走ってきた時期があった。 予期せぬ人生の転換期を迎えた時、「在外同胞文学賞」に出会った。 何かを書こうとすると、23 年の歳月の間、貧弱で粗雑になった私の母国語と向き合わなければならなかった。 恥ずかしさと戦い、勇気と希望で自分を励ましながら、3 度目のドアを叩いた。

美しい母国語で人生ストーリーを編み出す機会をくださった在外同胞財団と至らない作品を世に出してくださった審査委員の方々にも深く感謝申し上げます。そして何より今の私を支えてくださった沢山の貴重なご縁に感謝申し上げます。

これからもよろしくお願いいたします。